

從文本論立場再次檢討文法單位的意義

— 目標朝向建構日本語教育教材論之基礎 —

落合由治

淡江大學日本語文學系教授

摘要

不論在台灣或日本，日語教育或日本語學的領域，都正邁入個大轉變時期。其背後都存在著日本語學的重要課題。回顧目前使用於日語教育之上的日語相關文法概念的發展，大體可以區分為三大類。一為沿用自日本語學史上由索緒爾(Saussure)的共時言語側面而進行分析的橋本文法等國語文法之依據文法的品詞分類而成的分類體系。其二為用之於日本語學之上，導入歐美言語研究的觀點之種種概念。其三為應日本語教育之需而產生的「複合詞」、「基本句型」等日本語教育上常用的文法概念。如此不同立場的產生諸多不同見解立場的混淆現象，影響到日本語研究以及應用於日語教育教育上的說法不一致，而產生種種的困難。此現象在台灣の日語界，已是時常耳聞、廣為周知的事實。

本論文首先回顧近年來逐漸活絡有關文法概念或重新審視品詞的論點，再指出問題所在。並提供從具體的文本分析的表達主體的表達活動之個人言語的視點，重新省思目前共時言語為中心的文法概念的一個契機。

關鍵字：文法概念 社會言語 個人言語 表達主體 活動

**Reexamination of grammatical unit seen from text theory:
Aiming at a fundamental making of the teaching material theory for
Japanese education**

Ochiai, Yuji

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Japanese-language education and Japanese study have entered a big transition stage now. The problem of Japanese study exists in this background. The flow of a grammatical concept concerning Japanese used by Japanese-language education has two currents. One is the taxonomy from a Saussure Lang side to the extension of a national language historical aspect and it means some classifications of a grammatical part of speech that has the origin of the Japanese historical grammar like Hashimoto grammar etc. In addition, there are various concepts used in the Japanese study that has introduced the viewpoint of the origin of the research about language in Europe and America following it. Another trends are many grammatical concepts in Japanese-language educations such as "Compound word" and "Basic sentence pattern" that were born from the necessity of Japanese-language teaching. The mixture phenomenon in such many different standpoints have caused confusion and difficulty of contents on the explanation that used in Japanese researches and teachings.

It introduces the outline of the activated discussion related to the review of grammatical concept and part of speech in this thesis. And, this thesis will review some grammatical concepts by the Lang from a parole aspect of the expression activity on expression subject that suits concrete texts as a problem institution.

Keywords: grammatical concept, Lange, parole, expression subject,
Activity

テキスト論から見た文法的単位の再検討

—日本語教育教材論の基礎造りに向けて—

落合由治

淡江大学日本語文学科教授

要旨

日本語教育や日本語学は現在、大きな転換期に入ったと考えられる。その背景には日本語学の課題も存在する。現在、日本語教育で使われている日本語に関する文法概念の流れには、大きく国語史的視点の延長でソシュールのラングの側面から研究を進めてきた橋本文法などの国文法由来の文法的品詞分類による分類体系、それに接続する形で欧米の言語研究由来の観点を導入した日本語学で使用されている様々な概念、そして日本語教育の必要性から生まれて来た「複合辞」「基本文型」などの日本語教育での文法的概念である。こうした異質な立場の混淆現象がもたらしている日本語研究および教育上の説明内容の混乱や困難については、台湾の日本語教育の現場でも周知の事実と言えよう。

本論文では、近年、活発化している文法概念や品詞の見直しに関わる議論の概略を踏まえながら、問題提起として、今までのラング中心の文法概念を、具体的テキストに即した表現主体の表現活動のパロール的視点から見直すことにする。

キーワード：文法概念、ラング、パロール、表現主体、活動

テキスト論から見た文法的単位の再検討

—日本語教育教材論の基礎造りに向けて—

落合由治

淡江大学日本語文学科教授

1. 言語観と文法的単位の問題点

現在、日本語教育と母語研究としての日本語学に同時に関わる研究者からは、両者の現場で用いられている日本語学の基礎である言語観と文法的単位について大きな問題点が指摘されている。

その震源のひとつは、日本語教育と日本語学とを相関させて研究している立場からの見解である。今までもすでに多くの論がすでに出ているが、最近の比較的まとまった研究として二人の研究者を取り上げたい。一人は田中寛（2004）、田中寛（2010）である¹。田中寛（2004）は、日本語教育では重要な文型として主要な文法項目としている「複文」構造を作る文型として「ト・バ・タラ・ナラ」の条件表現、それに付随する条件表現として「テハ、テモ、ノニ」、さらに「カラ、ノデ」「コトデ、コトカラ」「タメニ」「ヨウニ」を取り上げて、実際の使用例によって詳細な用法研究をおこなっている。これらは、日本語教育の中で「文型」として言語教育の主要内容になっている重要な文法的単位であるのは言を待たない。田中の研究が優れている点は、それまでも日本語学習のための教授者学習者用辞典として出されていた森田良行・松木正恵（1989）²、グループ・ジャマシイ（1998）³など日本語教育での教育と学習のために実施さ

¹ 田中寛（2004）『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』白帝社および田中寛（2010）『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房

² 森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型—複合辞の意味と用法』アルク

³ グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

れていた研究と、日本語学の立場で従来の品詞を超えて用例収集が行われた山崎誠・藤田保幸（2001）⁴、野田尚史編（2005）⁵、山崎誠・藤田保幸編（2006）⁶など日本語学的視点から日本語教育の文法的単位にアプローチする研究とを結合して、日本語教育で使用するすべての文型を「複合辞」として統合し、それを日本語学の一領域として位置づけようとした点にある。田中寛（2010）は、こうした日本語教育で「文型」として教えられている表現について今までの語形項目と研究史とを集大成し、「複合辞」の観点から文法的単位を集成しようとしたものである。

しかし、田中寛（2010）の方法には未解決の問題が残っている。「複合辞」という概念は、元もと20世紀前半の日本帝国時代に日本の領域で行われていた日本語教育から始まった教育用概念が起源であり、国際文化振興会（1944）⁷などの「表現文型」の概念と研究成果を受けて永野賢（1953）が新しい文法的単位として提起したものである⁸。一方、日本語教育で現在、使われている文法概念は寺村秀夫（1982）⁹以降の日本語教育文法に拠るところが大きい。しかし、実は寺村秀夫（1982）の文法の基礎には橋本進吉のソシユール言語学に基づく言語観と文法概念¹⁰があり、その点で元もと日本語教育が目的ではなく、むしろ母語話者のための言語学としての「国語学」あるいは「国語教育」の理論樹立を目指す目的から生まれた概念や

⁴ 山崎誠・藤田保幸（2001）『現代語複合辞用例集』国立国語研究所

⁵ 野田尚史編（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版

⁶ 山崎誠・藤田保幸編（2006）『複合辞研究の現在』和泉書院

⁷ 国際文化振興会（1944）『日本語表現文典』（復刻版、冬至書房1998）

⁸ 永野賢（1953）「表現文法の問題—複合辞の認定について」金田一博士古稀記念論文集刊行会編『金田一博士古稀記念言語民族論叢』三省堂

⁹ 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

¹⁰ 橋本進吉（1946）『橋本進吉博士著作集第一冊・国語学概論』岩波書店。両者の関係については落合由治（2007）『日本語の文章構成に関する基礎的研究—テキスト論と結合して』致良出版社参照。

airiti

品詞分類を継承している。

こう見てくると、田中寛のような立場が生まれる理由もよく理解できる。つまり、現在、日本語教育で使っている言語教育用の概念は、一つは永野賢が日本帝国時代の日本語教育から継承した外国人に日本語を外国語として教える日本語教育の立場で提起した「複合辞」、もうひとつは、橋本進吉がソシュールのラング論を日本語に応用することによって、母語としての日本語に関する整然とした品詞と文法体系を構築した橋本文法の概念という、その起源が大きく異なる異質な二種類の研究的基盤から生じた混成概念から成っているのである。従って、前者の視点からは第二言語教育のための文法概念と文法的単位というテーマが大きくなり、後者の視点からは母語教育としての国語教育のための文法概念と文法的単位というテーマが大きくなる。こうした異なる起源の概念と文法的単位が折衷され混在した形の内容が現在の「日本語教育」で最も核心的な教育内容とされ、また母語の言語学であると同時に日本語教育のための言語理論的基礎でもある「日本語学」で研究のために使用されているのである。その結果、現在の日本語教育では、国語学の流れを受けた文法概念（主に品詞分類に関わる概念）¹¹、西洋の言語学の用語を日本語に当てはめた概念（モダリティー、テンス、アスペクト等、主に文法範疇に関わる概念）¹²に加え、日本語教育の必要性から産

¹¹ 明治以降の日本の文法学説史には様々な論があるが、現在教育や研究の現場で使われている基本的文法用語の多く、特に品詞に関わる用語は橋本進吉の一連の著作から来ている用語が多い。橋本進吉『国語学概論』（1972）『著作集第一巻・国語学概論』岩波書店所収）、橋本進吉『国語学研究法』（1972）『著作集第一巻・国語学概論』岩波書店所収）等を参照。

¹² こうした呼び方は第二次世界大戦後、日本国の20世紀後半の時代になって用いられ始めた用語であるが、基本的には山田孝雄、橋本進吉、松下大三郎、時枝誠記など20世紀前半の研究者の「陳述」「詞と辞」の基本的パラダイムを継承している。一例として日本語におけるアスペクトの概念の展開は、平澤洋一（1985）「動詞の意味と状態アスペクト」『城西大学女子短期大学部紀要』2-1P173-183 参照。日本語記述文法研究会編（2003-2010）『現代日本語文法』1-7 くらしお出版で全体的な集約的成果を見ることが出来る。

まれた教育用概念（文型や類義表現の用法や類別に関わる概念および文法的説明方法）¹³が相互に十分検討されることがないままに並行、混在して現場で用いられている。これらは、特に海外の日本語学習者に提示される場合、大きな問題をもたらしかねない。台湾で市販されている日本の文型辞典類や参考書類に見られる日本語の説明に関わる問題は、台湾の日本語教育の教育現場を混乱させ、学習者に多大の困難を与えないであろうか。¹⁴

現在、日本でも文法概念の基本に帰って、今までの品詞分類や用語を見直す動きが始まっている。¹⁵これらは語から出発して文に到たという見方を出発点に文法論を再検討する立場であるが、本論文では、文章から文、文から語へという今までの文法研究とは異なる流れを持つテキスト論の視点から、文章の中での文機能と品詞機能に焦点をあてて、以下のように、日本語教育のための言語理論的基礎造りに向けた事例研究的考察を試みる。

- (1) 現在までの文章論・表現論の流れの中で、文法的単位の問題がどう位置づけられたか、時枝誠記を中心に概

¹³ 複合辞は第二次世界大戦前の日本語教育の必要性から生まれた概念であるが、最も具体的な提案をしたのは永野賢で文章論との関係で従来の国語学では記述しきれない語から文へという文中、文末の意味的まとまりをもった表現形式を捉えようとした。現在でも田中寛（2004）『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』白帝社、田中寛（2010）『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房のように、日本語教育目的での類義表現研究で広く活用されている概念である。松木正恵（2003）「複合辞研究史(1)「複合辞」の提唱—永野賢の複合辞研究」『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』52P15-26以降の一連の論文で研究史が紹介されている。

¹⁴ 日本語文法用語の混乱は、新旧の日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店を見るとよく分かる。1982年初版の旧版では、国語学の諸説がそのまま文法として並記されている。一方、2005年初版の新版では、西洋言語学起源の形態論、格等々の用語で項目が説明され、特定学派の解説が文法の説明とされている。しかも、動詞等の品詞は国文法由来のままの分類が使われているのに対して、活用形の説明には西洋言語学起源の特定学派の解説が接ぎ木されているなど、折衷的で錯雑雑然とした内容であり、教育現場の統一の見解には到底なり得ないと言える。

¹⁵ 国語学の視点からは、村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房での一連の論究があり、日本語教育的日本語学の視点からは山崎誠・藤田保幸編（2006）『複合辞研究の現在』和泉書院などの論が出ている。

略を述べる。

- (2) 今回は物語文（近現代小説）に焦点を当てて、その基本的構成の中での文機能の類型と、そこで機能する品詞機能について考察をおこなう。

2. 文章論・表現論における文法的単位の問題

2.1 時枝誠記の文法的単位の措定

日本における文章論・表現論研究の端緒を作った時枝誠記は、言語単位の問題について言語研究の最も基本的な課題として考察を加えている。研究の対象となる言語の単位について、時枝は以下のように述べている。

（前略）言語の究極的単位として単語を考へ、単語を基本とし、出発点として、その結合に於いて言語を考へて行かうとする構成的な考え方をとらないで、分析以前の統一体としての言語的事実を捉へ、それを記述することから出発しようとするのである。このやうな研究対象としての統一体としての言語的事実を、言語に於ける単位と名付けるならば、言語に於いて単位と認められるものはどのやうなものであろうか。言語に於ける単位的なものとして、私は次の三つのもを挙げようと思ふ。

- 一 語
- 二 文
- 三 文章¹⁶

20世紀前半の日本語研究で重要であった言語単位の定義について時枝は以下のように規定している。

（前略）私がここに云ふ単位といふのは質的統一体としての全体概念である。人を数へる場合に単位として用ゐられる三人、五人の「人」は、長さや重さを計量する場合に用ゐられる尺や瓦

¹⁶ 時枝誠記（1988/1950）『日本文法口語篇』岩波書店 P18。

airiti

が、量を分割するための基本量を意味するのと異なり、また全体を分析して得られる究極体を意味するのとも異なり、全く質的統一体を意味するところの単位である。¹⁷

現代でも学校文法で使われている橋本進吉がソシュールのラングの概念を日本語に適用して、意味と音声との結合を言語の基本単位として捉え、「文」、「文節」、「語」という分析で言語単位を確定していったのにたいして、時枝は言語単位を「語」、「文」、「文章」という「質的統一体」と規定した。

この「質的統一体」としての「文」を時枝は「主体」と「場面」の関係から考察している。時枝の「詞」を「客体的なもの」、「辞」を「主体的なもの」と分け、「詞」と「辞」の入れ子によって文が構成されているとした文論は、陳述論と呼ばれ、その後の文論研究に大きな影響を与えた¹⁸。さらに、「質的統一体」という概念は、その後の日本の文章論・表現論の形成に大きな影響を与えた¹⁹。

この「質的統一体」の言語論を、本論文でも日本語品詞論の再検討のための基本的モデルとして用いたい。そこで、具体的にどのように、時枝が「語」と「文」を考察しているか、まとめておきたい。

時枝は、「語」と「文」について、以下のように述べている。「語」についての「質的統一体」には二つの側面がある。一つは、例えば、「語」は、「[ハナ] という音声の結合を以つて花を表」すような一まとまりで明確な「思想内容の一回過程によって成立する言語表現である」²⁰。もう一つは、「一切の語について、その思想の表現過程

¹⁷ 時枝誠記 (1988/1950)『日本文法口語篇』岩波書店 P19。

¹⁸ 尾上圭介 (1996)「文をどう見たか—述語論の学史的展開」『日本語学』明治書院 VOL. 15-8P4-12、仁田義雄 (2005)『ある近代日本文法研究史』和泉書院第1部参照。

¹⁹ 時枝の同時期に影響を受けた研究者として今井文男 (1961)『表現学仮説』P1-10、永野賢 (1962/1959)『学校文法文章論』朝倉書店 P22-26 参照。土部弘 (1973)『文章表現の機構』くろしお出版 P47-60、永尾章曹 (1975)『国語表現法研究』三弥井書店 P11、林巨樹 (1976)『近代文章研究—文章表現の諸相—』明治書院 P93-97 など文章論・表現論の流れがある。

²⁰ 時枝誠記 (1988/1950)『日本文法口語篇』岩波書店 P43。

airiti

を検するのに「概念過程を含む形式」である「詞」と、「概念過程を含まぬ形式」である「辞」に分けられ「詞が常に客体界を表現するのに対して、辞は、客体界に志向する言語主体の感情、情緒、意思、欲求を表す」²¹。

同じく、「文」についても、以下のように、述べている。一つは、「文」は「客体界と主体界との結合において成立する」「具体的な思想の表現」で、「話し手の判断、願望、欲求、命令、禁止等の主体的なもの」の表現である「陳述」によってまとりをつくる「統一性」を持ち、「陳述」によって「完結性」を備えている²²。もう一つは、「文」は「客体的表現、詞が、主体的表現、辞によつて包まれ、また統一される」ことで成り立つ²³。

以上から、「語」と「文」という「質的統一性」を成立させるものには、二つの条件があることが分かる。一つは「主体」と「客体」との関係で、これは言語の存在条件としての「主体」と「場面」の関係である。もう一つは、時枝が「文」での「陳述」と呼んでいる「概念過程を含む形式」と「概念過程を含まぬ形式」によって、「客体」を表現するものと「主体」を表現するものという双極性的方向性を言語表現として統一する作用である。

前者の「主体」と「場面」の関係は言語主体とそれが関わる生活世界との関係の中での言語活動であり、現在の様々なコミュニケーション・モデルを想定すればよいであろう²⁴。一方、後者の双極性

²¹ 時枝誠記 (1988/1950)『日本文法口語篇』岩波書店 P51-54。

²² 時枝誠記 (1988/1950)『日本文法口語篇』岩波書店 P197-204。

²³ 時枝誠記 (1988/1950)『日本文法口語篇』岩波書店 P206。

²⁴ ソシユールが言語の本質を言語活動と捉えて以来様々なコミュニケーション・モデルが生まれ、基本的なパラダイムになっている。英語圏で最も広く用いられているのはシャノンとウィーバーのモデルである (Claude E. Shannon, Warren Weaver (1949) *The Mathematical Theory of Communication*, University of Illinois Press)。その他、ローマン・コブソンやソシユールも言語研究で用いられている (参照: 朝妻恵里子 (2009)「ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論—言語の「転位」研究ノート」『スラヴ研究』56P197-213 吉武正樹 (2005)「対話的コミュニケーション論構築へ向けて: ソシユールとウイトゲン

airiti

で区別されるような言語表現の方向性を統一する作用は、「概念過程を含む形式」が「主体」と「素材」の関係に対応するとすれば、「概念過程を含まぬ形式」は「主体」と「場面」の関係に対応すると考えられる。

しかし、ここには、一種の矛盾がある。「概念過程を含まぬ形式」が「主体」と「場面」の関係に対応するとしても、時枝の言語過程説には「主体」と「素材」しか表現されていないため、「概念過程を含まぬ形式」は言語過程説では位置づけできない。また、「概念過程を含む形式」も「概念過程を含まぬ形式」も共に「言語」である以上、実はラングという性格を同時に持った一般的表現であり、時枝が言語過程説で苦闘した「一般的表現を以て如何にして特定個物を表現することが出来るかの表現法の問題と、一般的表現より、如何にして特定の個物を認定し得るかの理解上の問題」は説明できない。

2.2 時枝誠記の文章論の視野

この言語という一般的な形式を使って、なぜ主体は個別的事象、体験を表現できるのかという矛盾を解決するために、時枝は『文章研究序説』によって「主体」と「場面」の関係をさらに考察しようとした。時枝は、「言語研究の一部門」として「文章研究」を位置づけるにあたって、「文章は、語とも、文とも異なつた統一構造を持つた一全体」であり、「問題は、それぞれの統一体を統一体たらしめる統一の原理を明らかにすること」であるとしている。それは語の結合で文を説明し、文の結合で文章を説明するような「原子論的単位観」から、「文を組み立ててあるものは、語ではなく、文の成分」であり、また「建築物の究極の材料は、鉄材や木材や石材であっても、家そのものの統一的全体性は、家を組み立ててある」各部屋の「配置結合」によって説明されなくてはならないような「質的単位観」

シュタインに学ぶ『ヒューマン・コミュニケーション研究』33P121-148)。

airiti

への「根本的な変革」である²⁵。これは、現代の用語では他との関係によって自己の意味が決まるような、一全体の中で各部分が機能する「構造」あるいは「構成」の概念と見ることができる²⁶。

しかし、ここでも時枝の言語論は、言語単位をめぐる考察と同じ矛盾を抱えている。時枝は文章を「質的統一体」だと言いながら、「主体」と「場面」の関係から考えずに、「文章とは、一応、「文の集合したもの」と定義しておく」²⁷という、「概念過程を含む形式」と言える「主体」と「素材」の関係から定義を行った。そのため、一つの文単独でも、ある時には文になるが、ただ、文を集めても文章にはならないという文章研究の単位の問題に陥り、「文と文章とは、ある場合には重なり合って、文であると同時に文章であるといふ場合もあり得るけれども、一般には、文章は、文を越えた一つの独自の統一体である」²⁸という、新しいパラドクスに直面した。この問題は、具体的場面から切り離れた言語構造として言語を見る欧米のテキスト(ディスコース)研究のテキストの定義とも重なっている²⁹。

時枝の考察は、主体と場面との関係からではなく、文章とは、「文の集合したもの」という「主体」と「素材」の関係からの方向で進められ、「文章の表現形式の特異性は、言語表現が、根本的に、時間的・継時的・線条的性格を持ってゐることに規定されたもので、これは、語・文・文章に通ずる根本的性格である」と定義された³⁰。

²⁵ 時枝誠記『文章研究序説』(1961/1960) 山田書院 P12-13。

²⁶ テキスト研究や文学研究での構造の概念は、認知言語学で最も典型的に見られる。山梨正明(1995/1999)『認知文法論』ひつじ書房。文学研究でも構造主義の文学研究はその典型といえる。朴眞秀(1999)「物語研究における「構造」の概念：作者と読者のかかわり方」『比較文学・文化論集』16P84-94 参照。

²⁷ 時枝誠記『文章研究序説』(1961/1960) 山田書院 P14。

²⁸ 時枝誠記『文章研究序説』(1961/1960) 山田書院 P17。

²⁹ 一例として橋内武(1999)『ディスコース—談話の織りなす世界』くろしお出版では「言語行動の記録・資料」、「まとまりのある言語表現」、「テキストとコンテキスト」を「テキスト」の定義としている(同書 P21-24)。時枝の定義は、「まとまりのある言語表現」に近い。

³⁰ 時枝誠記『文章研究序説』(1961/1960) 山田書院 P49。

2.3 時枝のパラドクスの意義

「主体」「場面」「素材」のコミュニケーション・モデルで言語単位を問題にする際、時枝が常にこうした矛盾にぶつかったことには逆に大きな意義が認められる。いわば「素材」の言語学であるラングの言語学を思考した橋本は、考察の最初から実際のコミュニケーション「場面」で、ある「主体」が言語を実際に使っている事例を想定しない言語学を志向した。時枝の場合、自身の考察はそれ以上発展しなかったが、「主体」の言語活動（ランゲージュ＝ラング＋パロール）に注目した言語学を立てるという言語観は革新的であり、日本ではその後のモダリティーの文法に影響を広げることになった。同時に「文章・談話」というまったく新しい言語単位が日本語研究に生まれた。その流れには、「質的統一体」を「文」から線条性によって「文章」が生まれる規則として捉える、永野賢などに見られるような「文章論」と呼ばれる研究と、文章という「質的統一体」の特徴を現にある言語の秩序（たとえば小説、新聞記事、評論などの作品の構成や各言語単位の用法）から読み取ろうとする「表現論」と呼ばれる研究になった。両者は「質的統一体」としての「文章」についての、双極的な観点と言える。

時枝の考察には、もう一つの特徴がある。それは、文章研究の領域について、「個性の表現といふことは、一般的な類型においてのみ可能なのであって、類型を離れては、個性の表現といふこともありえない」とし、「文体論」は「文章に対する類型論」だと捉えて³¹、以下のように述べている点である。

（前略）文体は、ただ音韻、語彙、語法において成立するものではなく、表現主体が、素材や題材をどのようにして把握し、どのような態度で表現するか、また、表現の場面をどのように

³¹ 時枝誠記『文章研究序説』（1961/1960）山田書院 P41。

airiti

意識し、それによってどのように調整するかによつて、そこには幾つかの類型が存在することになるのである。³²

つまり、「決して単なる表現形式の問題として見るべきでなく」、「文章表現の機構」のあらゆる事項の参加動員によつて成立するもので、「我々の生活における言語の諸機能の相違により、書簡文、記録文、感想文、広告文、慶弔に関する儀礼的文章等々の類型が生ずる」として、「文体論」を表現行為と社会的機能によるジャンル論とに関係させた点である³³。

これによつて、多様なジャンルの文章に関わる要素が考察の対照となり、時枝は、文章の「主体」の観点から文章での「伝言」、「引用」、「合作」、「編集」、「推敲」、「改稿」、「別稿」を問題にし、言語の「場面」と「素材」の観点で、小説や劇での読み手や観客を取り上げ、「継時的素材」と「同時的素材」を区別した³⁴。時枝によつて、輪郭としてではあるが、言語活動として社会的生活的に生み出されている様々な「文章」が研究対象として扱えるものであることが初めて示された。ここからも「文章史」や「文体論」など、多様な方向での日本語の文章研究が始まった³⁵。コミュニケーション活動として多様な社会的言語様式をとらえた現代のジャンル論の起点となっているミハイル・バフチンの論と同じ視点をそこに見ることができる³⁶。

本論文では、時枝の、「概念過程を含まぬ形式」と言える「主体」と「場面」との関係を社会的な表現ジャンルと捉える。コンテクス

³² 時枝誠記『文章研究序説』（1961/1960）山田書院 P39。

³³ 時枝誠記『文章研究序説』（1961/1960）山田書院 P40-41。

³⁴ 時枝誠記『文章研究序説』（1961/1960）山田書院第2篇第1章第2、3、4節参照。

³⁵ 文章論・表現論の多様な研究は表現学会編（2013）『言語表現学叢書』清水堂出版参照。

³⁶ バフチンのジャンル論に基づく対話理論については西口光一（2013）『第二言語教育におけるバフチンの視点』くろしお出版参照。

トとしてのそうした社会的ジャンルは、「概念過程を含む形式」である「主体」と「素材」との関係において表現される個別的な言語表現の背景であり、通常は意識化されない。しかし、「主体」は常に「場面」との関係において、ある表現を選択するため、「概念過程を含む形式」である「主体」と「素材」において、それが反映されて私達が日常、社会的に経験する様々な言語活動や表現活動の成果が具現化されている。つまり、社会的ジャンルのある言語表現をジャンル性の中で取り上げることで、時枝の言語論の中では可能性にとどまった、「主体」と「場面」との関係の中で「概念過程を含む形式」である「主体」と「素材」を具体的な言語表現の規則として帰納できると言える。そこで、本論文では、具体的なジャンルを持った表現として物語文を取り上げて、その中から「文章」「文」「語」の関係を捉えることで、ジャンル言語的品詞論の事例を示してみたい。

3. 現代小説に見る言語単位

今までの言語研究では、基本的にはソシユールの一般言語学的立場を継承して社会的に表現可能なジャンルの中で「主体」が表現を選択して構成した具体的な作品について、そのジャンル性や「主体」の個別性を捨象することで言語の共通性を抽象していた。しかし、その言語を使用する社会の成員は様々な言語習得環境からくる運用力の相違はあるにしても、すべての成員に共有されるラングにもとづいて、個々の表現（発話：パロール）を使用して表現活動をしていると考えられる。よって、具体的ジャンルを持った個々の「主体」の表現には、個別的個性的側面（パロール）と社会的一般的側面（ラング）が共に具現化されている。よって、そのジャンルで社会的に認められた「主体」の表現の、その言語社会の代表的な言語的表現物としての価値は言語研究において十分に尊重する必要がある。こ

ここでは日本の現代小説を代表する作家として村上春樹を取り上げ、それに先行するテクストになっていると思われる近代作家・志賀直哉の作品との共通点を探しながら、ジャンルの表現の「類型」を見出すことにしたい。

3.1 村上春樹作品による言語単位モデル

村上春樹で事例に取り上げる作品は近代小説と相似の文章構成を持つ以下の作品である。Ⅰ、Ⅱ等のローマ数字は段落番号、①、②等の丸数字は段落内の文番号である。(以下、同様)

例1 村上春樹「アイロンのある風景」

- Ⅰ ①電話が鳴ったのは夜中の12時前だった。②順子はテレビを見ていた。③啓介は部屋の隅で耳に、ヘッドフォンをあてて、半ば目を閉じ、左右に首を振りながら電気ギターを弾いていた。④早いパッセージの練習をしているらしく、長い指が6本の弦の上をすばやく行き来している。⑤電話のベルはぜんぜん聞こえてない。⑥順子が受話器を取った。
- ⑦「もう寝てたか？」と三宅さんがいつものぼそぼそとした声で言った。
- ⑧「だいじょうぶ、まだ寝てないよ」と順子は答えた。
- ⑨「今、浜にいるねんけどな、流木がけっこうぎょうさんあるねん。大きいやつができるで。出てこれるか？」
- ⑩「いいよ」と順子は言った。⑪「今から着替えて、十分で行く」
- Ⅱ ①順子はタイツをはいて、その上からブルージーンをはき、タートルネックのセーターをかぶり、ウールのコートのポケットに煙草をつっこんだ。②財布とマッチとキーホルダー、それから啓介の背中を軽く蹴飛ばした。③啓介はあわててヘッドフォンをはずす。
- ④「これから浜に焚き火に行ってくるよ」
- ⑤「また三宅のおっさんかよ」と啓介は眉をしかめて言った。⑥「冗談きついな。今は二月だぜ。それも夜中の12時だぜ。今から海に行って焚き火するってか？」
- ⑦「だからあんた来なくていいよ。一人で行ってくるから」
- Ⅲ ①啓介は溜息をついた。②「俺も行くよ。行きますよ。すぐ用意するからちょっと待ってな」
- Ⅳ ①彼はアンプのスイッチを切り、パジャマの上からズボンをはき、セーターを着て、ダウン・ジャケットのジッパーを首まであ

airiti

げた。順子は首にマフラーを巻き、毛糸の帽子をかぶった。³⁷

以上の内容を文型の文章中での機能に注目して整理すると以下のようになる。表では生教材を扱い始める日本語教育中級レベルの現場で説明のポイントとして取り上げられそうな点を中心に挙げた。当然、教育現場での学習者レベルや授業の目的によってこうしたテキストから取り上げるべき内容は、現在の文型辞典や文法書で話題にされているような観点から見れば文、文節、語のレベルでさらに細かく、用法の差異等を検討する必要があることは言うまでもない。一度にすべてのレベルを示すことは非常に煩雑になるので、ここでは文とその理解を中心に日本語教育中級レベルの読解や文法のクラスで、問題になる注目点のみを示すことにした。また、地の文と会話文は機能から見て明らかに異質なテキストであるため、ここでは小説のテキストの基本的構造をなしている地の文のみに焦点を当て、会話文の部分は「～」で省略して示した。機会を改めて、より細部の文法的単位については検討していきたい。

表1 村上春樹「アイロンのある風景」による言語単位モデル

段落	文	機能型 (文型→文節型 →語型)	文章中での機能 (テキスト構 造的役割)	語彙	社会文化記号
I	①電話が鳴ったのは夜中の12時前だった。	1)～は～だ/だった 2)～が～する/したのは 3)～の～(夜中の12時前)	特定の時の提示	電話、夜中、～時前/～が鳴る	電話が鳴る=20世紀後半の電話の普及 夜中の12時=夜型生活
I	②順子はテレビを見ていた。③啓介は部屋の隅で耳に、ヘッドフォンをあてて、半ば目を閉じ、左右に首を振りながら電気ギターを弾いてい	1)～は～ていた。 2)～は～て、～、～ながら～ていた。 3)～て/～ながら 4)半ば～閉じる/左右に振る(修飾関係と要素)	登場者の文脈の焦点化(文脈起こし)	順子、啓介/テレビ、部屋、ヘッドフォン、目、首、電気ギター/隅、左右/半ば/～を見る、～に～を	テレビ=20世紀後半の普及 電気ギター等の音響機器=20世紀後半の普及

³⁷ 村上春樹(2003)「アイロンのある風景」『村上春樹全作品1990-2000』3講談社。

	た。			あてる、～を閉じる、～を振る、～を弾く	
I	④早いパッセージの練習をしているらしく、長い指が6本の弦の上をすばやく行き来している。⑤電話のベルはぜんぜん聞こえてない。	1) ～が～ている 2) ～は～てない(ていない) 3) ～らしい 4) ～らしく/すばやく 5) 早いパッセージ/長い指 6) ぜんぜん～ない 7) すばやく行き来する(修飾関係) /～の～(パッセージの練習、電話のベル、6本の弦)	登場者の情景の焦点化(描写)	練習、指、弦、パッセージ、ベル/すばやく、早い、長い/6本、上/～が行き来する、～が～聞こえる	音楽用語=パッセージ、メロディー、テンポ=20世紀後半のポピュラー文化/音楽好きな若者
I	⑥順子が受話器を取った。⑦「～」と三宅さんがいつものぼそぼそとした声で言った。⑧「～」と順子は答えた。⑨「～」⑩「～」と順子は言った。⑪「～」	1) ～が～した 2) ～は～した 3) 「～」と言う/「～」と答える/「～」(引用表現あるいは会話表現) 4) ～声で言う/いつものぼそぼそとした声(修飾関係)	登場者の動きの焦点化(描写)	受話器、声/いつもの/ぼそぼそとした/~を取る、～と言う、～と答える	受話器=20世紀後半の普及
II	以下省略	以下省略	以下省略	以下省略	以下省略

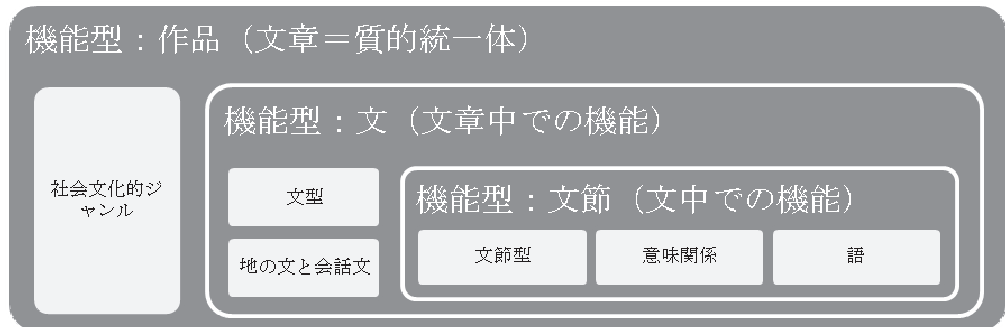
(注) ①網掛けは注目した文レベルの機能型。②機能型は1)から順番に文、さらにそれを分節した文節、語レベルの単位になるように配列した。③語彙は、文中での出現順位を見ながら名詞類、形容詞、副詞、動詞の順に配列した。④社会文化記号は、主に名詞あるいは名詞+動詞の持つ現代日本社会での暗示的イメージの例をあげた。

以上の表1から、紙幅の関係でテキスト構成上それぞれ異なる機能を果たしている部分のみを取り上げる。表から分かるように文、語の単位は、実際には小説という具体的ジャンルを持った文章(テキスト)中で一定の位置や順序を以って、特定の時の提示、登場者の情景や動きの焦点化というテキスト構造的役割を与えられて機能している。今まで実際に用いられている意味の場としての文章と切り離されて、独立した文型や文法事項とされてきた、「～である」「～が(は)～ている」「～は(が)～する」等の文型は、こうしたテク

airiti

ストの中では具体的に用法が決まっていることがわかる。

図1 テキストレベルでの言語単位構造



しかも、その機能は、もっとも機能型の大きな単位といえる文に相応している。その意味でテキスト中では文という文法的単位は自明である。その文の中をさらに細かく分節していくと、現在いわゆる文法事項として説明されている各種文節の意味関係や品詞的機能が初めて問題として浮かび上がるが、それはより上位のテキスト的機能には直接、関係しない。テキストレベルで見ると文法的単位は以下のような内包的入れ子型であることがわかる。

テキスト中の語彙についても、現代の日本語学で出発点になっている理論的フレームである基本語彙や現代語彙のようなテキスト外部からの概念的カテゴリーフレームで作用しているのではなく、むしろ具体的なテキストである作品中での表現構造に置かれて初めて、読者に対して特定の社会文化的意味空間を形成するような複数の名詞が「20世紀後半」「大衆文化」のような特徴的概念カテゴリーを独自に構成して、作品の理解に大きな役割を果たしている。語彙についても、語彙は文型を通じて作品の意味世界を構成するが、その役割は全体のまとまりである上位単位のテキストの中で初めて機能する。

このように、テキストから文法的単位の機能を考察すると、下位

の機能型はひとつ上の機能型を具体的形態的に構成する要素となるが、しかしその機能はより上位の機能型がより下位の機能型に付与しており、上位の機能型なしに下位の機能型は機能できない。つまり、現在の日本語学のように、ある機能型をそのレベルのみで考察すると、それを構成する下位の機能型は理解できるが、上位の表現型を欠いていると当該機能型の具体的機能は不定のままになり、それをどう使えばよいのかという日本語学習で最も大切な表現形式の用法が分からないということになる。文を考察すれば、文節や語彙の機能は理解できるが、文自体の機能や用法は実は理解できない。文の機能を知るにはより上位の機能型、すなわち具体的ジャンルを持った社会的に通用しているテキストが必要になる。ここに現在の日本語学が抱える大きな問題があると考えられる。

3.2 近代小説による言語単位モデル

類例の比較により言語単位を考察するモデル造りをするために近代小説の代表的作家・志賀直哉の相似する作品を取り上げる。

例2 志賀直哉「好人物の夫婦 一」

- I ①深い秋の静かな晩だった。②沼の上を雁が啼いて通る。③細君は食臺の上の洋燈を端の方に引き寄せて其下で針仕事をして居る。④良人は其傍に長々と仰向けに寝ころんで、ぼんやりと天井を眺めて居た。⑤二人は永い間黙って居た。
⑥「もう何時？」と細君が下を向いたまま云った。⑦時計は細君の頭の上の柱に懸つてゐる。
⑧「十二時十五分前だ」
⑨「お寝みに致しませうか」細君は矢張り下を向いた儘云った。
⑩「もう少しして」と良人が答へた。
- II ①二人は又少時黙った。
- III ②細君は良人が餘り静かなので、漸く顔を擧げた。③そして縫つた糸を扱きながら、
「一體何していらつしやるの？そんな大きな眼をして……」と云った。
③「考へて居るんだ」
④「お考へ事なの？」

IV ①又二人は黙った。②細君は仕事が或切りまで来ると、綿を断り、針を針差しに差して仕事を片付け始めた。

③「オイ俺は旅行するよ」

④「何いつていらつしやるの？ 考へ事だなんて今迄そんな事を考へていらしたの」

⑤「さうさ」

⑥「幾日位行つていらつしやるの？」

⑦「半月と一ト月の間だ」

⑧「そんなに永く？」

⑨「うん。上方から九州、それから朝鮮の金剛山あたり迄行くかも知れない」

⑩「そんなに永いの、いや」

⑫「いやだつて仕方がない」

⑬「旅行おしんなつてもいいんだけど、一いやな事をおしんなつちやあいやよ」

⑭「そりやあ請け合はない」

⑮「そんならいや。旅行だけならいいんですけど、自家で淋しい氣をしながらお待ちして居るのに貴方が何處かで今頃そんな……」かう云ひかけて細君は急に、「もう、いやゝゝ」と烈しく其言葉をはふり出して了つた。

⑯「馬鹿」良人は意地悪な眼つきをして細君を見た。⑰細君も少しうらめしさうな眼でそれを見返した。³⁸

以上の内容について文型のテキスト中での機能に注目して表1と同じ視点で整理すると以下の表2のようになる。ここではあるジャンルでの言語使用実態の変化を見る意味で出版当時の旧仮名旧漢字の資料を用いる。以下の表2のように、近代小説と現代小説では非常によく似た文章構成の中で同じ機能型が同じ形式に同じ役割が対応して用いられていることがわかる。

表2 志賀直哉「好人物の夫婦」による言語単位モデル

段落	文	機能型 (文型→文節型 →語型)	文章中での機能 (テキスト構 造的役割)	語彙	社会文化記号
I	①深い秋の静かな晩だつた。②沼の	1) ~だ/だつた 2) ~が~する	特定の時の提示	秋、晩、沼、雁/上/深い、	季節(秋、雁) = 日本の文化的伝

³⁸ 岩波書店 (1973) 『志賀直哉全集』第2巻

	上を雁が啼いて通る。	3) 深い秋/静かな晩 4) ~て~ 5) ~の~ (秋の~晩/沼の上)	情景の焦点化 (描写)	静かだ/啼く、~を通る	統、季節感 晩=生活時間帯の近代化 新旧仮名遣い=時代相の違い
I	③細君は食臺の上の洋燈を端の方に引き寄せて其下で針仕事をして居る。④良人は其傍に長々と仰向けに寝ころんで、ぼんやりと天井を眺めて居た。	1) ~は~て~て居る (た)。 2) ~て~ 3) ~で~する 4) 長々と仰向けに寝ころぶ、ぼんやりと眺める (修飾関係) 5) ~に~ 6) ~の~ (食臺の上の洋燈、端の方、)	登場者の文脈の焦点化 (文脈起こし)	細君、食臺、洋燈、針仕事、良人、天井、仰向け/上、下、傍/長々と、ぼんやりと/~を引き寄せる、~をする、寝ころぶ、~を眺める	細君・良人=近代家族 (夫婦)/性別役割 洋燈、天井=近代化、洋式化 =明治、大正期の近代化
I	⑤二人は永い間黙って居た。	1) ~は~て居た 2) 永い間黙る (修飾関係) 3) 二人	二人の情景の焦点化 (描写)	二人/永い間/黙る	黙って居た=ディスコミュニケーション/日本的夫婦関係
I	⑥「~」と細君が下を向いたまま云った。⑦時計は細君の頭の上の柱に懸つてゐる。 ⑧「~」 ⑨「~」細君は矢張り下を向いた儘云った。 ⑩「~」と良人が答へた。	1) ~が~した 2) ~は~した 3) ~は (が) ~に~てゐる 4) 「~」と云ふ、「~」と答へる、「~」(引用表現あるいは会話表現) 5) 矢張り~向いたまま (修飾関係) 6) ~した儘~ 7) ~の~ (細君の頭の上の柱)	登場者の動きの焦点化 (描写) 時の焦点化 (描写)	細君、良人、時計、柱、頭/下/矢張り/~を向く/~が懸かる、~と云ふ、~と答へる	時計、夜更かしの文化的意義=近代化
II	①二人は又少時黙った。 以下省略	1) ~は~した 2) 少時黙る 3) 又 以下省略	登場者の動きの焦点化 (描写) 以下省略	二人/又/少時/黙る 以下省略	黙る=ディスコミュニケーション/日本的夫婦関係 以下省略

(注) 表の内容についての説明は表1参照。

表1と表2を較べてみると分かるように、時代も作家も全く異なる作品であるが、「~である」「~が (は) ~ている」「~は (が) ~する」等の文型の形式と機能は、志賀直哉の作品でも村上春樹の作品とまったく同一で、こうしたテキストの中では具体的に用法が決まっていることがわかる。そして、作者も時代も異なる作品であつ

ても、図1に示したような作品レベルでの機能型の文章から文へ、文から語への入れ子型の単位構造は表2でもまったく同一である。ただ、両者で差異のあるのは表記体系（新仮名遣・新漢字：旧仮名遣・旧漢字）および使用する言語スタイル、語彙の時代的变化（現代語：近代語）である³⁹。

つまり、一見すると差異ばかりで共通点がないように見えるテキストレベルでの言語表現には、表1と表2から分かるような、非常に明確な文レベル、語彙レベルの機能型の働きが具現されており、それを文法的規則として明確に規定することができる。そして、そうしたあるジャンルを持った異なるテキスト資料間での共通性を出発点にすることで、より使用実態に即し、機能型を実際に使うことに重点を置いた日本語教育のための文法的単位の帰納が可能になるであろう。

4. テキスト論に拠る文法的単位の考察手順

このように具体的ジャンルの中で文法的単位の用法を帰納していく事例研究の繰り返しにより、「主体」が常に「場面」との関係においてある表現を選択し、「概念過程を含む形式」である「主体」と「素材」において、それが反映されて成立している言語活動や表現活動の重要度に応じて、今までのラング記述の再整理が可能になるであろう。その手続は以下のようにモデル化できる。

図2 ジャンル言語モデルによるラング単位の再整理の方法

³⁹ 日本語教育では重視して来なかったが、すでに近代語は現代の日本語母語使用者からは忘却されつつあり、改めて近代と現代の差異と同質性を認識することも、今後の日本語研究および教育では重要といえる。日本語学でもすでにこうした研究の必要性が具体的に大きな問題として取り上げられつつある。明治書院（1998）「特集近代語から現代語へ」『日本語学』17-6等を参照。



今回は近代小説と類似の文章構成の現代小説を取り上げたが、もちろん現代小説のスタイルそのものは非常に多様性があり、どれを選ぶかによってどの基本的機能型が文章構成上、重要な役割を果たしているかは変わってくる。しかし、近代小説との類縁性の大きい文章構成を基本的類型に据えることで、原型と応用系、発展系のような関係で各種構成の関係を捉えることは可能である。また、今回は物語文の言語作品を取り上げたが、文章の基本的類型には他の類型も多数あり、またマルチモーダル、マルチジャンルのメディアジャンルにはそのジャンルの特異な表現類型が多様に存在するため、その中でそれぞれ基本的類型を決めていく必要もある。その際の優先順位の付け方は研究のためにという目的と、教育のためにという目的で異なる場合も考えられるが、近現代で一致した表現構成を持っている構成を基本にすることで、各種構成の関係の共通点の多さを重要度の判定基準に据えることもできる⁴⁰。

いずれにしても今まで蓄積されてきたラングとしての日本語研究を「主体」が常に「場面」との関係で生み出してきた表現という

⁴⁰ マルチモーダル、マルチジャンルな表現についての表現機能の研究は泉子・K・メイナード(2008)『マルチジャンル談話論—間ジャンル性と意味の想像』くろしお出版参照。発表者の基本的機能型から見たマルチモーダル、マルチジャンルな表現についての表現機能の研究は、落合由治(2011)「映像構成から見たテレビドラマのテクスト的特性の考察—日本語教育リソース研究の拡大と充実のために—」『比較文化研究』99P7-24、落合由治(2012)「『台湾日日新報』の掲載広告に見る身体性表象」『台湾日本語文学報』31P153-178参照。教育的観点での小説テクストの言語学的考察は、頼錦雀(2014)「語彙から見た日本語教育教材としての村上春樹「螢」の可能性」『2014年度第3届村上春樹国際學術研討會國際會議手冊』淡江大學村上春樹研究室 P97-104 参照。

airiti

「場」に置換することで、明確な表現構造の中での研究対象として、多様な言語単位の再組織化について新しいパラダイムを生み出せるに違いない。

(注記) 本論文は、2014年11月の台湾日語教育学会での発表内容に加筆修正をおこなったものである。また、科技部專題研究計画 MOST 103-2410-H-032 -047 -MY2 による成果の一部である。

テキスト

村上春樹 (2003) 「アイロンのある風景」『村上春樹全作品 1990-2000』3
講談社
岩波書店 (1973) 『志賀直哉全集』第2巻

主要参考文献

落合由治 (2007) 『日本語の文章構成に関する基礎的研究—テキスト論と結合して』致良出版社
グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
泉子・K・メイナード (2008) 『マルチジャンル談話論—間ジャンル性と意味の創造』くろしお出版
田中寛 (2004) 『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』白帝社
田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
時枝誠記 (1988/1950) 『日本文法口語篇』岩波書店
時枝誠記 『文章研究序説』(1961/1960) 山田書院
西口光一 (2013) 『第二言語教育におけるバフチンの視点』くろしお出版
仁田義雄 (2005) 『ある近代日本文法研究史』和泉書院
日本語記述文法研究会編 (2003-2010) 『現代日本語文法』1-7 くろしお出版
野田尚史編 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
橋本進吉 (1946) 『橋本進吉博士著作集第一冊・国語学概論』岩波書店
表現学会編 (2013) 『言語表現学叢書』清水堂出版
松木正恵 (2003) 「複合辞研究史(1)「複合辞」の提唱—永野賢の複合辞研究」『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』52P15-26
村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型—複合辞の意味と用法』アルク
山崎誠・藤田保幸 (2001) 『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
山崎誠・藤田保幸編 (2006) 『複合辞研究の現在』和泉書院
山梨正明 (1995/1999) 『認知文法論』ひつじ書房

References

- GurupuJyamashii (1998) *Kyoshi to gakusyusha no tameno nihongobunkeijiten*. Kuroshioa shuppan, Japan.
- Hashimoto,S. (1946) *Hashimoto shinkichi hakase chosakusyu Vol.1, Kokugogakugairon*. Iwanamishoten, Japan.
- Hyogengakkai(Eds.) (2013) *Gengohyogengaku shosyo*. Shimizudou syuppansha, Japan.
- Matsuki,M. (2003) Fukugoujikenkyu No.1:”Fukugouji” no teisho; Nagano masaru no fukugouji kenkyu. *Wasedadaigaku kyoikugakubu gakujyutsukenkyu; Kokugo&kokubungaku hen*,No.52,P15-26. Japan.
- Maynard.K.S. (2008) *Multi-Genre danwaron: KanGenresei to imi no sozo*. Kuroshio shuppan, Japan.
- Morita,Y.&Matsuki,M. (1989) *Nihongo hyogen bunkei: Fukugouji no imi to yoho*. Alc, Japan.
- Muraki,S.(2012) *Nihongo no hinshitaiki to sonosyuhen*. Hitsuji shobo, Japna.
- Nihongo kiyutsunbunpokenkyukai (Eds.) (2003-2010) *Gendainihongobunpo*, Vol.1-7. Kuroshio shuppan, Japan.
- Nishiguchi,K. (2013) *Dainigengokyoiku niokeru Bakhtin tekishiten*. Kuroshio shuppan, Japan.
- Nitta,Y. (2005) *Aru kindai nihongobunpokenkyushi*. Izumishobo,Japan.
- Noda,H.(Eds.) (2005) *Communication notameno nihongokyouikubunpo*. Kuroshio shuppan, Japna.
- Ochiai,Y. (2007) *Nihongo no bunshokousei nikansuru kisotekikenkyu: Textron toketsugoshite*.Chiryu syuppansha,Taiwan.
- Tanaka,H.(2004) *Nihongofukubunhyogen no kenkyu: Setsuzoku to jyojyutsu no kozo*. Hakuteisha, Japan.
- Tanaka,H. (2010) *Fukigouji karamita nihongobunpo no kenkyu*. Hitsuji shobo. Japan.
- Teramura,H.(1982) *Nihongo no syntax to imi*, Vol.1. Kuroshio shuppan, Japan.
- Tokieda,M. (1961/1960) *Bunshokenkyujosetsu*. Yamada shoin, Japan.
- Tokieda,M. (1988/1950) *Nihongo bunpo kougohen*. Iwanami shoten, Japan.
- Yamanashi,M. (1995/1999) *Ninchibunporon*. Hitsuji shobo,Japan.
- Yamazaki,M.&Fujita,Y. (2001) *Gendaigofukugoujiyoureisyu*. Kokuritsukokugokenkyusho,Japan.
- Yamazaki,M.&Fujita,Y.(Eds.)(2006) *Fukugoujikenkyu no genzai*. Izumi shoin, Japan.

※2015年2月28日原稿受理、4月25日審査通過